

市大文学部と「都市文化研究」再考

趣旨説明

山崎 孝史

2013年12月8日(土)、大阪市立大学大学院文学研究科・文学部は文学部創設60周年記念事業の一環として、学術情報総合センター文化交流室において、記念学術シンポジウム「市大文学部と『都市文化研究』再考」を開催した。文学部は1949年に法文学部文学科として12専攻でスタートし、1953年に学部が創設されると、翌年に修士課程、翌々年に博士課程が設置され、1968年に5学科12専攻に拡充され、全国でも有数の人文社会科学の研究拠点となる。1999年に学部は3学科15コースに改編され、大学院は2001年にアジア都市文化学専攻が新設されることによって、4専攻16専修の陣容となった。

大阪市立大学は、日本第二の都市である大阪市に立地する公立大学として、伝統的に都市研究の拠点として発展してきたが、文学研究科におけるアジア都市文化学専攻の創設は、その視野をアジアに広げ、人文(文化)研究を都市研究の一つの核として据えるという研究科の「マニフェスト」を意味するものであった。そして、この「マニフェスト」は2002年に、世界水準の研究教育拠点を目指す文部科学省の「21世紀COEプログラム」に採択されることによって、名実ともに文学研究科・文学部の研究フロントとして確立される。採択課題は「都市文化創造のための人文科学的研究」であり、その推進拠点として「都市文化研究センター」が創設された。

この「都市文化」というキーワードは、2007年に「21世紀COEプログラム」の後継プログラムである「グローバルCOEプログラム」に本学「都市研究プラザ」が採択されることによって、さらに展開・拡充される。このプログラムの課題名は「文化創造と社会包摂に向けた都市の再構築」であり、大都市大阪の抱える課題を明確に意識したものであった。

こうして文学研究科・文学部は、多様な人文社会科学の分野から構成されながら、「都市文化研究」という一つのマニフェストを掲げ、21世紀最初の10年を疾走する。しかし、グローバル化や失われた10年によって大学を取り巻く状況が厳しさを増すにつれ、そうした研究が果たして文学研究科・文学部の各分野・各教員が目指すべき共通の地平なのかについて、疑問の声も聞こえるようになった。

本シンポジウムは、まさしく上に述べた文学研究科・文学部のこれまでの軌跡を振り返り、特に過去10年にわたって掲げてきた「マニフェスト」を、これからの研究の展望を踏まえながら再定義しようとする試みとして位置づけられる。したがって、まず、第一セッションでは「21世紀COEプログラム」や「グローバルCOEプログラム」を通して研究を進めてきた若手研究者やそれらの時代に着任した若手教員が「研究フロントとしての都市大阪の可能性」を論じ、第二セッションでは『都市文化研究』のこれまでとこれから」と題して、各プログラムの元推進者が基調講演を行い、シンポジウムを企画した教員と共に討議する構成とした。

以下はその記録であるが、都市大阪に立地する公立総合大学の文学研究科・文学部が21世紀初頭に何を目指そうとしたのかを記す一つの道標として参照されることを願いたい。

プログラム

大阪市立大学文学部創設 60周年記念学術シンポジウム
市大文学部と「都市文化研究」再考

2013年12月8日(日) 10時10分～15時30分
於：大阪市立大学杉本キャンパス学術情報総合センター 1F 文化交流室

開会あいさつ：池上知子（大阪市立大学文学部長・心理学）

趣旨説明：山崎孝史（大阪市立大学文学部教授・地理学）

第1セッション：研究フロントとしての都市大阪の可能性

- ◆海老根剛（大阪市立大学文学部准教授・表現文化学）
「エクセレンスの大学，人文学，都市 ～ドイツの議論を糸口に～」
- ◆笹島秀晃（大阪市立大学文学部講師・社会学）
「組織論的な芸術社会学からの都市研究への視座」
- ◆王 静（都市文化研究センタードクター研究員・アジア都市文化学）
「フードツーリズムと新・大阪文化創造」
- ◆山口 晋（目白大学社会学部専任講師・地理学）
「ストリートの「文化実践」からみる都市研究の可能性」
- ◆総合討論
*司会進行：山崎孝史

第2セッション：「都市文化研究」のこれまでとこれから

- ◆谷 富夫（甲南大学文学部教授・社会学）
「「都市文化研究」の創造と展開－文学部2000年代をふりかえって」
- ◆佐々木雅幸（大阪市立大学都市研究プラザ所長・経済学）
「包摂型創造都市・大阪」
- ◆パネルディスカッション
*パネラー：佐々木雅幸，谷富夫，山崎孝史
*コーディネーター：土屋貴志（大阪市立大学文学部准教授・哲学）